

日本文化のみならず、人類文化全体の根幹に「アニミズム」や「シャーマニズム」があると宗教史や宗教学や人類学は考えてきた。そのような、「アニミズム」や「シャーマニズム」というものは、単なる過去の文化遺産にすぎないものなのか、それとも人類史や生命史の未来を展望するときにもう一度意味と力を持つものとして浮かび上がってくるものか、現代文明の袋小路の中で今改めて「シャーマニズムの未来」を展望してみたい。今なぜ「シャーマニズム」を問題とするのか? 「シャーマニズム」の再発見と再評価が21世紀を生きるわたしたちにさまざまなヒントと力を与えてくれると考えるからだ。今後、人類が人類自身の感覚やコミュニケーション能力を深め、拡大させることができなければ、この未曾有の環境破壊や社会変動や闘争や戦乱を乗り越えていくことはできないだろう。そんなとき、わたしたちはシャーマニズムを、「さまざまな存在世界や目に見えないモノとの感受とコミュニケーションと対話のアート(ワザ・技芸)」ととらえることで、未来への展望を切り拓く道を具体的に確かみたい。そのアートは、動植物や目に見えない諸存在との異種間コミュニケーションのワザや、21世紀における身心の変容や、自殺者3万人超の時代の「負の感情の超え方やそれとの付き合い方の問題」を含んでいる。考えてみれば、宮沢賢治や南方熊楠や折口信夫といった人々は、そのような感受とコミュニケーション能力を持って

いたかけがえのない先達たちであった。そのような、多角的なコミュニケーションのアート(ワザ)の獲得と体現が21世紀文明の共有財産とならなければならぬのではないか。「シャーマニズム」を過去の「迷信」とか「危ない呪術」ととらえるのではなく、コミュニケーション能力の枠や幅の拡張深化ととらえ、それをさまざまな角度から論議し表現することで、わたしたちの未来を創造する新しい感性のあり方を模索したい。哲学、宗教、医療、心理学、芸術・芸能、ボディ・ワーク、身体技法、スポーツ……。さまざまな観点から「シャーマニズム」を再検討する手始めに、今回、シャーマニズム研究の日本における第一人者の佐々木宏幹氏と、「天賦典式」というヴィジョンと身体表現によってシャーマニズムを現代舞踏に具現した磨赤児氏を基軸に、各領域で最前線を切り開いてきた学者と表現者による知と身の饗宴(シンポジウム)を行いたいと思う。

★NPO法人東京自由大学2011年度特別企画シンポジウム
「シャーマニズムの未来—見えないモノの声を聴くワザ」
日時: 2011年4月23日(土)13:00~17:30 会場: なかのZERO小ホール
「大重潤一郎 ドキュメンタリー作品特別上映会」
日時: 同日 9:45(開場、10:00上映開始)~12:00 会場: なかのZERO視聴覚ホール

2010年度前期講座報告

主催ゼミ

『現代人と死生観』

講師: 島蘭 進 (東京大学大学院教授・宗教学)

日時: 5月28日(金)・6月25日(金)・7月23日(金) (全3回) 担当: 谷上 康子

島蘭先生の講座・ゼミは5年目をむかえました。今回2010年度は「現代人と死生観」というタイトルでした。

第1回目「死生観」の最初の興隆—では、死生観という成り立ちや武士(道)の死生観など8ページの資料を読み解いていただきました。

第2回目—戦争を生き延びる—では、第二次世界大戦ですさまじい戦争体験をした人々の死生観を講義されました。

第3回目—虚無・死者とともにあること・手作りの死生観—では、私たちが現代人は多様な境遇からどのように死と向き合い、自分なりの死生観をどのように意義深く考えたらよいのかということ学びました。

今年度もゼミを受講された方々の活発で熱心な質問・疑問、興味ある感想などが投げかけられ充実した内容で盛況裡に終ることができました。

2011年度も講座・ゼミが引き継がれます。島蘭先生、受講者の皆さまと有意義な時間を過ごせたことに感謝します。



谷上 康子 (運営委員)

特別企画

『巨石ハンター須田郡司 世界石巡礼満願報告会』

講師: 須田 郡司 (巨石カメラマン)

日時: 8月8日(日) 担当: 岡野 恵美子

約1年間にわたる世界石巡礼を満願成就した須田郡司さんの報告会が催された。合計40か国、115か所以上の石たちとの出会いの中から、その軌跡やエピソードを交えて、あっという間の2時間であった。悪路を数時間かけてたどり着いた巨石など、とても我々には貴重な画像であった。石は世界中どこでも、その土地の宗教や風俗と切り離せない。地球の基層文化としての石文化を知ることは生物多様性への理解につながる、という須田氏。一人だけ闖入してきた小学生が、陰陽石について質問したところ、返答に窮してしまった氏のやさしさがほほ笑ましかった。 酒井 孝 (理事・運営委員)



事務局だより

2010年度の会員総会において理事・監事・顧問の変更が承認されました。ながい間、理事・監事をつとめていただいた皆さま有難うございました。

	退任	新任
理事	上田 紀行・内海 信彦・岡野 征治・細野 昌美	井上 喜行(事務局長)
監事	石川 みな子・井上 喜行	齋藤悠・山口 卓宏
顧問		上田 紀行・島蘭 進・西川 隆範

なお、事務局は引続き、火・木・金 (13:00~18:00) 渡辺恵実が従事します。

●http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/ ●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.15 2010年(平成22年)10月10日発行
編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870
デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

現代霊性学講座第一弾 ~連続シンポジウム~

仏教は世界を救うか? 「仏とは誰か」

第一回
「仏とは誰か」
(2010年9月19日土曜日) 報告
鳥飼 美和子 (担当・理事・副運営委員長)



パネリスト (写真左より) 井上 ウィマラ (高野山大学文学部スピリチュアルケア部門准教授) 藤田 一照 (曹洞宗僧侶・曹洞宗国際センター所長) 西川 隆範 (シュタイナー研究者) 鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授) 【司会】 コメンテーター 戸田 日晨 (遠寿院荒行堂住職)・野村 懐忍 (高野山東京別院執事)

「現代霊性学講座」第一弾 連続シンポジウム「仏教は世界を救うか ①仏とは誰か」が、神田の東京自由大学に総勢90人もの人々が集まって熱気に包まれて催された。

21世紀を迎え、自然環境、政治、経済、そして個人の精神生活も不安定な局面を迎えているが、その反動の様にスピリチュアルブーム、パワースポットブーム、仏像ブームなどがおこっている。それはどこまで有効だろうか?

精神文化、霊性の探究とは何か、東京自由大学の設立の趣旨でもある問題に、時間をかけて真剣に取り組む「現代霊性学講座」。その第一弾として仏教を取り上げた。

今から2500年ほど前、ブッダによって説かれた仏教。それは「苦しみからの解脱」の教えであり、多くの国に伝えられ多様な展開を遂げ、政治から個人の生活まで様々な影響を与えてきた。仏教の過去・現在・未来を、仏教の根本となる三つの宝、仏・法・僧をキーワードに問いなおす連続シンポジウムの第一回目であった。

パネリストは皆、今をアクティブに生きる自由な求道者。コメンテーターには、伝統仏教教団の中であって、問題意識を持って活動されている僧侶の方々だ。第一回は「仏とは誰か」と題し、「余はいかにしてブッディストとなりしか(How I became a Buddhist?)」という個人史、それぞれのブッダ観、仏教観、そして行の問題まで語っていただいた。

発言のトップバッターは井上ウィマラ氏。まず、ギターを手に「三宝帰依」の歌からはじまった。仏教との出会い、出家し、アメリカで瞑想を指導し、心理療法を学んでいるとき、生れたばかりの赤ちゃんを抱く機会があり、その時の小さな命へのほとほするような感覚は、常に慈悲の瞑想をしているとき以上のものを感じた。そこで大きな転換期を迎え、日常の中で修行のやり直しを期して還俗したこと。日常に戻ってみると家族関係こそきびしい道場だと感じる。ブッダとは、自分の人生から逃げず、生身の身体で生きつつ真理の法を見極めていった人であり、集団の中では助け合いを実践した人であることなどを語った。藤田一照氏は、狭い会場内の緊張を解くために、隣同士で手を合わせることから始め、小学校ころ見上げた星空に底知れないものを感じた体験が、禅の実践修業への根本動機となっていること。大学のころ、ボディワークや武術を体験して道を探していたとき禅に出会い、出家したこと。ブッダとは、特殊能力者ではなく自分と同じ人生の根本問題に真正面から取り組み道を示し、その道のずっと先にいる人。仏教はその道のある型にして保存してきたものだが、今後はさまざまなチャレンジされるべきで、自分はボディワークと交流しつつ禅の語られていない側面を提示して行こうとしている。また、仏教は経験指向ではなく行為指向のものではないか、と語った。西川隆範氏は、今日のテーマである、How I became a Buddhist? を考えてみると、自分は、I am a born Buddhist. であると思ったこと。幼い時から仏教的環境にあったこと。20歳の

時高野山に行き、大塔を拝観したことが転機となり、真言密教を学び伝法灌頂を受け、その後、シュタイナーの思想と出会ったこと。シュタイナーは地上のブッダとともに霊的なブッダの存在も指摘され、人間ブッダという側面だけでなく、超人としてみている。日本の霊性を通してシュタイナー思想そのものを変化拡大できるかを探ることがテーマであることを語った。コメンテーターの戸田日晨氏は、日蓮宗の百日荒行の伝統ある寺の住職であり、今回のパネリスト、コメンテーターの中でただ一人、寺で生れた方。仏教にとっての経験とはなにか。ブッダと霊界の関係はどうか、などを提起。野村懐忍氏は、在家の発菩提心で出家し、仏と出会うことが目的であること。仏教は己事究明型 一禅・止観等と仏恋慕型一 密教・浄土教の別がある。他方仏国土の現在仏をどう考えるか、などを提起した。

第2部で、司会の鎌田東二氏が、道(悟り)を求めめるために「行」をすることが仏教の特徴であり、神道には行が無いことを指摘した。続いて会場からの質問に多かった「行」の問題を取り上げた。

西川氏は、シュタイナーは時代によって行法も変わると言っていること。なぜ行をするのかは、今はまだ自己の完成ではない、自己を完成させたいという気持ちが動機ではないか。西洋人に比して東洋人はいきなり無の境地に至ったような気持ちになれるなどを語った。藤田氏は、行とは経験を蓄積することではなく、ひとつひとつ手放していくこと、Doingではなく、Undoing。それによって立ちあがってくるものであること。娑婆世界で習ったり身につけたりした価値観とは違うもので、できあいの行を自分に当てはめようとしても大切なものが抜け落ちてしまうことなどを指摘した。井上氏は、行とは日常の全ての中から、何が起きているのかを気づかせるものであること。行で定(サマディ)に入ること、神秘体験にこだわることを超えて、如実知見に至ることの重要性を指摘した。それによってより深い真実と出会う。それが仏教の特色ではないか、自分はまず瞑想ウィルス(?!!)を広めるのが使命と語った。

このシンポジウムで論議された問題は深く、かつ多岐にわたり、4時間では語りつくせぬものだった。アンケートでもこれから本番という時に時間が来てしまった、という感想が多かった。今回の話を整理し、見取り図を作り、次回はさらに充実した討議となるよう準備を進める予定である。道を求める方々、精神的に人生を統合しようとする多くの方々に集っていただけるよう願います。連続シンポジウムの小さな一石が、波紋となって広がりますように。

次回予定「仏教は世界を救うか? ② 仏法は真実か」

日時: 2011年3月5日(土) 13:30~17:30
会場: 東京自由大学 (会場が変更になる可能性もあります)

この連続シンポジウムの記録は、書籍化される予定です。

夏合宿

宮沢賢治

「オホーツク挽歌」「宗谷挽歌」を辿る最北への旅

苫小牧～小樽～宗谷～利尻島・礼文島～増毛 2010年7月30日(金)～8月4日(水)

「賢治の夏2010」 鎌田 東二 (NPO法人東京自由大学理事長)

今年の夏合宿は格別に思い出深いものとなった。合宿が終わって1ヶ月も経つのにまだその余韻に浸っている。理由は3つ。

1、合宿テーマが宮沢賢治最北の旅を体験するものであったこと。それによって賢治の心の闇やとし子への追悼や悔悟や想いや鎮魂の深さをありありと感じとれた。この1週間、賢治三昧、賢治漬け、賢治尽くしの毎日・毎時であった。

2、左膝軟骨圧迫骨折の癒えない中、利尻富士登拝ができたこと。標高1721メートルの利尻山の厳かさ、孤高、毅然とした美しさ。午前5時20分から歩き始め11時に頂上に到着。山頂の利尻山神社奥宮の御前で大祓詞奏上、横笛・法螺貝の奉奏。空から鈍い陽光が差し込んでぼかぼかと暖かく、白雲ドームが温室の中にいるかのよう。綿のような白い雲の傘の中にすっぽりと包まれて、胎内の中で憩っているような、やさしいのんびりした心持ちになった。このあったかい、完全脱臼的なリラクسس感の至福。

3、感謝の気持ちとともにこれを真っ先に書くべきであったが、小樽で幼少期を過ごした音楽家のあがた森魚さんに特別ゲスト講師を引き受けていただき、すばらしいあがたワールドをライブで堪能できたこと。そしてそれを支えてくださった長屋のり子さんや苫小牧自由大学の森れいさんや小樽詩人会の詩人のみなさま方のホスピタリティと詩心。皆様方に心からの感謝を申し上げるとともに、この貴重な共有した時間と詩を忘れないでいたい。

妹のとし子を亡くして悲嘆の中にいた26歳の宮沢賢治は、大正12年(1923)8月初旬、北海道を旅しながら、8月1日に「青森挽歌」、2日に「宗谷挽歌」、4日に「オホーツク挽歌」を書き上げた。喪失・哀惜・追想の荒波の中で賢治は何を見、何を感じたか。そのかなしみの一端に確実に触れることができた。

「天からの贈り物」 粟花 英子(会員)

小さきは 小さきままに 花持ちぬ 野辺の草花の 安けきを見よ
私の好きな言葉です。
礼文ウスユキ草の傍には 小さな花がまるで笑っている様に咲いていました。
礼文島の頂上からは目の前にお花畑 その後ろには藍色の海 その又うしろには登っている人が見えるのではないかと思う程はっきりと利尻富士が見え そして 悠々と舞っている鳥と青い空
私はこの天からの贈り物にのみ込まれてしまいました。
宇宙ってなんて美しいだろう
なんと気持ちがいいだろう
今ここを飛べたらいいのにナァ
こんな事を思いながらいつの間にか「赤色エレジー」にのって

なむあみだぶつ あみだぶつ
なむあみだぶつ あみだぶつ

小さな小さな声で歌っている幸せいっぱい自分の気が付きました。 冬も

この場に来たいと思いました。
帰りの船乗場の食堂で 井上さんの奥様から分けていただいたウニ丼。井上さんと乾杯したビール。言葉にはいい表せない程 旨かったです。

「利尻への風」 原田 修三郎(会員)

私は後半の旅に参加しました。場所は何処であろうと自由大学の合宿には参加するつもりでいた。何故か？ 昨年の天川、高野山の旅が素晴らしかったからである。そして今回の利尻島も素晴らしかった。一人では決してできない旅であった。企画していただいた、そして連れて行ってくださった自由大学のスタッフの皆様、鎌田先生ありがとうございました。宮沢賢治にとっての北海道北上の旅は、最愛の妹を亡くした後の、悲しみと追憶の旅であった。私にとっては亡き姉の追憶の旅でした。賢治の詩を聞いたり、海の風に吹かれたりしたせいか、朝目覚めると、私の心に沈んでいた、古くて遠い姉の感情が揺り動かされ「姉に対するすまない気持ち」が突然湧き上がってきた。私は小学校6年生の時に遭遇した、二十歳の姉の自殺による悲しみや様々な感情を思い出し泣いた。話を聞いてくれた吉田さんは「原田さん、それは浄化ですよ」と言われ、この旅は私と姉を浄化してくれる旅になったことをその時ふと気がつきました。話を聞いてくれた鳥飼さん、吉田さん、岡野さん、参加のみなさんありがとうございました。鎌田先生には利尻山では大変にお世話になりました。これまでにないくらいの楽しい登山でした。股関節が悪く登山はもうダメかと諦めていましたが、先生も膝の故障を抱え、頑張るその姿を見て、私も勇気を貰いました。利尻山の夕日や朝日に染まる雄大な姿は、半年分の東京でのストレスを吹き飛ばしてくれました。ありがとうございました。

「挽歌の海をゆく」 篠本 美知代(会員)

酷暑の東京を離れ、最北の旅五泊六日は極楽々々でした！
北海道は三回目でしたが、オホーツク海と日本海を同時に見渡せたのは、ケンジさんのおかげでしょう。
車中は賢治ファンでいっぱいでしたが、私は密かにアツモリ草とレブンウスユキ草に出合える日を心待ちにしていました。
旅の四日目、八月二日の桃岩展望台・徒歩三時間コースは至福の一日でした。群れ咲く白いウスユキ草の中にちりばめられたツリガネニンジンの紫、ハマナスの深紅、リシヒリナゲシの淡い黄色等々、その花々の上を浜風が一吹き流れていく。
山の花たちは控え目だから、足下まで近づくと、「私を見て々々」と声がする。風揺れる草花の中で、七月二日臍臓ガンで逝った親友のことが思い出された。めっぽう山野草に詳しい彼女と登った高尾や陣馬、箱根の山々のことを……。とし子と我が友アッチャンの魂が呼応して、見下ろすあの北海の水底に吸い込まれそうになりました。
HIARATAスタジオの森れいさんご案内の苫小牧の荒海も、長屋のり子さ

んが用意して下さった小樽の宿も、お寿司も、地元の方々との交流とあがた氏とホラ吹き先生のジョイントコンサートも、この旅を何倍も楽しく面白いものにして下さいました。

このすばらしい旅を計画して下さいました自由大学のスタッフの皆様、中でも吉田さんの名ガイドぶりに感服しております。ありがとうございました！

「風の旅」 松倉 福子(会員)

風が吹いている。
さわさわ・・・しゅるしゅる・・・びゅうびゅう・・・と。

北の大地のエネルギーと人々の温もりは
詩となり、唄になる。

濃く蒼い海から、波頭が走り
ウミネコがおいでと呼んでいる。

利尻富士は神々しい雲のドレスをまとい
天空に浮かぶ花々を斜めに揺らす。

まっすぐに海を見ている母のおさげ髪
波音に漂えば、ぼろり、ぼろりと輪郭が剥がれて落ちる。
私は、ただ風になり、波になり、渦巻きになる。
「踊ろうか?」

「踊りましょうか?」
天の川からこぼれた星ひとつ。
はるかな風が運んでくれた
すきとおった本当のたべものを
両の掌ですくいと そっとう合掌する。

母が青春時代を過ごした稚内の地で、宮澤賢治の詩と金子みすずさんの童謡を歌わせていただき、私にとって特別な旅になりました。
8月15日に星になった我が家のそら君(柴犬16歳)と、すべての衆生に敬意を込めて……

「東京自由大学2010年度夏合宿に参加して」 向井 千代子(会員)

五泊六日の合宿のうち、仕事の都合で後半のみ参加しましたが、賢治の「オホーツク挽歌」「宗谷挽歌」の足跡をたどる三泊四日の旅は十分に満足のものでした。利尻、礼文島は初めてなのに、どういいうわけか初めてとは思えない懐かしさを感じました。8月2日の夜の空に見た天の川、白鳥座、ヴェガ、アルタイル、カシオペア座、大熊座、北極星、加えて尾の長い流星はいかにも賢治にふさわしいもので、感激しました。バスの中での鎌田先生の賢治に関する講

義と朗読、吉田さんの「よだかの星」の朗読なども耳奥に残っております。利尻島の夕焼けの美しさのほかに、朝早く海辺に散歩に出て白鳥に出合ったのも良い思い出です。今春から自由大学の会員になったばかりの私にとって自由大学の精神に触れる貴重な旅となりました。ありがとうございました。

「宮澤賢治追想 そして 2010年度夏合宿」 吉田 美穂子(担当・理事・副運営委員長)

6月12日、NPO法人東京賢治の学校との協力で、宮澤賢治追想-心象風景から銀河のかなたへーを開催した。前半は『心象スケッチ』の上映会。後半は、花巻弁で賢治の作品を語り継いでおられる谷口秀子さんのお話と詩「オホーツク挽歌」と童話の朗読。
賢治は、花巻農学校で教鞭をとっていた学校生活を

この四ヶ年が/わたくしにどんなに楽しかったか/
わたくしは毎日を/鳥のやうに教室でうたうてくらした/
誓って云ふが/わたくしはこの仕事で/疲れをおぼえたことはない

と、詩っている。
『心象スケッチ』の中では、教え子さん達が半世紀前のことを鮮明に記憶しておられ、まるで昨日の事のように賢治先生の姿を伝えてくださる。茶目っ気たっぷりの長坂俊雄さん。明るい佐藤さん。誠実な照井謹二郎先生。農一筋の瀬川哲男さん。1990年代、賢治の風を求め一人旅をしていた途上で出会った方々の顔が、お声が、風景が写し出されると、もう心は銀河のかなたへ飛んでゆく。

宮沢賢治の北帰行を縦糸に、苫小牧・小樽でのあがた森魚さんとのジョイント・コンサートや利尻島礼文島の旅を横糸に企画した2010年度大型夏合宿。テーマは「宮沢賢治と辿る最北の旅」。

最愛の妹とし子を亡くし、悲嘆の中にいた賢治は、大正12年(1923)8月北海道を旅した。その旅の中で「青森挽歌」「宗谷挽歌」「オホーツク挽歌」を書き上げる。

心象スケッチ『春と修羅』を片手に北へ北へ北上した今年の夏合宿は、全身全霊で迎えてくださった長屋のり子さん・森れいさん・北の大地の詩人の方々。同行講師のあがた森魚氏・鎌田東二氏。日本海の海や風や食。お天気までもが神秘的に明滅しながら、第四次延長線上の追体験へと導いてくれました。皆様、ありがとうございました。

霧の苫小牧、祝津の番屋、小樽のライブ、雄大な利尻山、可憐なレブンウスユキ草、増毛の駅、この旅の幾きれかが、あなたのすきとほったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。

★NLに記載の感想文は、ほんの一部です。参加者全員の感想文は、夏合宿文集として作成致します。ご希望の方は、事務局までご連絡ください。



7/30(金) 苫小牧・前浜にて



7/31(土) 番屋「群来陣」にて集合写真



7/31(土) 地元の方々との交流、あがた森魚さんと鎌田さんのジョイントコンサート(小樽「御宿櫻井」にて)



7/31(土) 神威岬



8/2(月) 最北の山(Aコース) 利尻富士登山



8/2(月) 礼文島(Bコース) 桃岩展望台コースを散策



8/3(火) 宗谷岬(日本最北端)